

活動レポート

日本建築学会グローバル化人材育成プログラム

『世界で建築をつくるぞ!—グローバルな建築デザイン・マネジメント・エンジニアリング分野への入門』

国際委員会

事業概要

開催日：8月24日(木)～25日(金)

開催場所：建築会館ホール

参加者：学生52名(修了者：49名)、オーディエンス16名

グローバル人材育成事業

「海外事業の比率を高めざるを得ない日本の建築業界を担う人材育成に関して学会としてできることを」との中島前会長の思いに基づき企画されたのが「グローバル化人材育成プログラム」である。具体的には「世界で建築をつくるぞ!—グローバルな建築デザイン・マネジメント・エンジニアリング分野への入門」と題して、世界を舞台に各方面の第一線で活躍している方々に講演とグループワークの指導を担当していただき、全国の大学・高専から選抜された意欲のある優秀な学生に集まってもらうという企画だった。

このプログラムの第1回が8月24日、25日に実施された。講師陣は5名。全国各地から選抜された参加学生は52名。日本人だけではなく、留学生も10名程度参加してくれた。

一人目の講師は隈研吾氏。海外でのプロジェクトの経緯、建築家としての心構え等を具体的に伝えられた。二人目は東洋大学の志摩憲寿氏。都市人口の爆発的な増加とそれに伴う問題、他方で将来の人口減少と過疎化が確実にできるアジアの国々の実情等を伝えられた。三人目はアラップの小栗新氏。同社が整理した世界の都市の課題100を紹介した後、海外の都市の一つを選び、その都市が直面する課題を特定し、その解決に日本の建築業界だからこそできる貢献はどのようなものを議論してもらう形をとられた。四人目は、ベトナムの建築家ヴォ・チョン・ギア氏。日本で建築を学んだギア氏は、経済成長だけを重視する風潮への根本的な疑問を投げかけたうえで、自らの作品を紹介しながら、瞑想を重視した自身の仕事への取り組み方を説明された。そして五人目は、鹿島建設副社長の小泉博義氏。同社による実績の紹介を交えながら、世界の建設市場動向、日本の建設業による海外事業の多様さ、日本の建設業の強み等を伝えられた。

それぞれの講演の後、学生は8つのグループに分かれ、各講師が準備された課題に取り組んだ。この際には、ゼネコン、設計事務所、住宅メーカー、大学等で海外経験を積んでこられた技術者や経営者たちが、1グループに2名ずつメンターとして付き合われた。メンターの方々は、学生たちの積極性や自主性、知識の豊かさに驚かされたこと異口同音に語っていた。形式が整ってしまった今の就職活動ではなかなか発見することの難しい若者の持つ豊かな可能性が、期せずして再認識される形になったのは、今回のプログラムのもう一つの成果だったようだ。

松村秀一／東京大学、日本建築学会副会長(国際化担当)

活動報告

1. グローバル化人材育成プログラムへの参加者の概要

2017年8月24-25日に開催されたグローバル化人材育成プログラムは国内の建築系学校に通う学生を対象として実施し、参加者52名のうち49名の学生が修了した。参加者には建築会館までの交通費を一部支給することとし、全国から意欲のある学生が参加した。本プログラムは多様な人材を集めたプログラムになるよう計画したが、そのねらい通り、さまざまな学生の参加を実現した。特に建築会館で実施するセミナーは関東圏の学生が大半を占めることが多いが、本プログラムには東京から距離のある地域の学生が多く参加した。日本建築学会発行の『大学(建築関係学科)名簿 2016年版』によれば、建築系学科に所属する大学生のうち47%の学生が集中しているが、53%は関東以外で学んでいる。本プログラムを修了した49名の学生のうち、26名の学生が関東以外の地方から参加したが、これは大学生の在籍比率に一致した参加構成となっており、交通支給とした効果が確認できた。

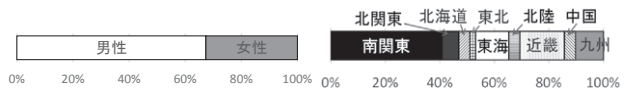


図1 参加者の男女比



図2 参加者における留学生の比率



図3 参加者の所属学校の種別



図4 参加者の所属大学の所在地

2. グローバル化人材育成プログラムへの参加者に対するアンケートの回答結果

本プログラムの参加者を対象にアンケートを実施した結果を図6-9に示す。図6に示すように意匠設計系への就職を希望する学生が参加者の過半を占めた。また、図8に示すように将来、海外で仕事をしたいと考えている学生が多く参加している。参加学生の満足度(図9)は非常に高く、「大変有意義」だと感じた学生が6割を超え、「意義なし」「全く意義なし」と回答した学生はいなかった。なお、アンケートには自由記述欄があり、他大学の学生と交流できて良かったという意見とが

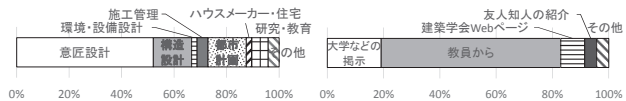


図6 将来就職を希望する分野

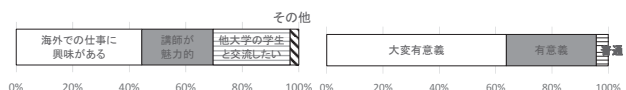


図7 本プログラムの情報の入手先

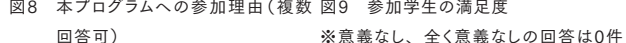


図8 本プログラムへの参加理由(複数回答可)

図9 参加学生の満足度 ※意義なし、全く意義なしの回答は0件だった。

多数寄せられた。近隣に建築学科のある大学がない地域から参加した学生が多く、本プログラムの意義を感じさせる結果となった。

石田航星／工学院大学

参加学生の感想

1. グローバル化は必至

本プログラムは、講師が出題する課題をもとにワークショップ、成果発表、講評を行うものでした。プログラム全体を通して学んだことは、わが国は人口減少であるが、世界では増加の傾向にあるため、市場を海外に求めていくことは必至であるということです。特に東京五輪以降はグローバル志向のビジネスモデルに転換しなければ成長は見込めないという現実が迫っていることを認識させられました。

ワークショップでは世界で実務経験があるメンターの方が各グループに2人ついていただき、ご指導いただくという贅沢なものでした。メンターの方のお話で特に印象深いものは、「日本企業が参画することにより、その国や地域にどんなメリットがあるかを考える必要がある」ということです。海外の状況はもちろんのこと、日本企業であることや自社でなければならない意味といった自己分析的な視点も大切だと改めて実感しました。

加えて、全国の大学・高専から学年、専門分野、関心領域が異なる属性の学生が集まったことで、多様な考え方に触れることができました。建築という学門を学び、世界で活躍するという共通の意識を持ったものと議論ができたことが大変に嬉しく、刺激を受けました。

このたびは、世界で建築をつくることに対して議論を行い、考えを深めることのできる貴重な機会をいただき、ありがとうございます。本プログラムで得たことを糧に研究活動に精進していきます。最後に、協力していただいたすべての方に感謝申し上げます。

小島寛之／秋田県立大学

2. グローバルな方々との新しい出会い

研究室の先生から紹介・推薦いただき本プログラムに参加しました。今回世界で活動していて世界を知る5人の講演を聞く機会をいただきました。世界といっても国によってさまざま、その国の現状や、そこで実際に仕事をしていく難しさ、必要な覚悟・心得を教えてくださいました。2日間で講演、ワークショップ、発表、講評を5セット行うというハードスケジュールでしたが、講師によってワークショップでのお題はさまざま、ただ海外に何かしらの関連を持った仕事がしたいと考えていた私にとってすべてが新しく、刺激的な時間でした。今回集まったプログラム参加者の中には中国人、韓国人、カンボジア人等多国籍の人が集まり、また6人ほどで構成されるグループにはさまざまな企業の方々もメンターとして2人ずつついてくださりました。講演だけでなく、グループの人やメンターの方とワークショップをするだけでも新しい発見があり、すべてが新鮮でした。限られた時間の中で豊富な人生経験を持つ人々と発表内容をまとめるのは難しかったのですが、どの方針でやってもきっと面白いものになるだろうという期待感の中の作業でした。

私は以前中国に住んでいたことがあり、それをきっかけに海外との関連のある仕事に興味を持ちました。海外で仕事をする事の難しさや楽しさは知っているつもりでしたが、今回のプログラムを通して国や人が違えば経験することも違い、まだまだ知らないことだらけだということに気づくとともに、さらに海外での仕事に魅力を感じる機会となりました。

笠原真紀／東京電機大学

3. 建築を生み出す協力、本セミナーで学んだこと

グローバル化社会の影響を受けて地球の反対側から来日した私は世界での活躍を目指し、今回、日本建築学会主催で初の「グローバル化人材育成プログラム」に参加させていただいた。持続可能な建築の必要やグローバル化社会への対応など、現在の建築家が建築を造るときに考慮すべき問題は多い。そこで、隈健吾氏やヴォ・チョン・ギア氏など、世界で活躍されている建築家の経験から学習し、将来自分も活かせる知識を求めて参加した。

プログラムは講演、ワークショップと発表会から構成され、「日本と海外の建築の違い」や「海外で期待される日本のゼネコン」など、コンテンツが充実していたことに興味が引かれた。教授陣の講演は期待を上回り、内容が大変参考になり、建築家の見本となるものだった。各講演から担当の教授に課題をもらい、ワークショップとしてグループに分けられ、その課題に取り組んだ。それから時間内にグループで議論し、成果を発表した。日本各地から集まり、意見の異なるメンバーと組み目標の達成のために力を合わせることは有意義な経験に思った。なぜなら課題に自分だけでは見つけ出せなかった答えや自分の中になかった考え方も学べたからである。さらに、グループで発表し著名な教授陣から講評を受けたことはめったにない刺激的な経験だった。

セミナーの中で、一番印象に残ったのはシンガポールの建設現場をテーマにした課題だった。シンガポールは多様な人口構成のため、中国系やインド系、ユーラシア系などさまざまな人種の交流・協力から一つの建築が生まれる。だからこのセミナーに参加して、社会をこれからも支えていくのは人々のお互いの協力だと強く感じた。今回、みんなで現代社会について語り合える機会をくださったこともその協力の証であり、丁寧に教えてくださった隈健吾氏、志摩憲寿氏、小栗新氏、ヴォ・チョン・ギア氏、小泉博義氏そしてメンターの方々に感謝の言葉を送りたいと思う。

カサド・オマール／大阪大学

メンター（16名）

安藤徹治（積水化学工業）、石田航星（工学院大学）、大輪聡司（鹿島建設）、小西健太（積水ハウスシンガポール）、小見山陽介（エムロード）、権藤智之（東京大学）、佐々木仁（Arup）、佐竹 浩（大林組）、島崎大（清水建設）、清水里司（日本設計）、勢山詔子（福永設計）、西岡浩是（竹中工務店）、前田康貴（大成建設）、松浦裕己（NTTファシリティーズ）、松本邦雄（大和ハウス工業）、山崎隆盛（日建設計）



ワークショップの様子



懇親会の様子



賞状授与の様子



集合写真